

令和2(2020)年度
高等学校における教科指導充実に関する調査研究
～資質・能力の育成を図る授業改善の推進～

と　い　は　い　と

問い合わせ意図

～教師の意図ある働きかけで生徒の学びを深める～

• 何をねらって
その「問い合わせ」を発しますか？ •

国語科



国語科

本事例で育成を目指す資質・能力

内容の解釈を深め作品の価値を考察する力

事例 概要

読み流してしまいそうな叙述を指摘し、着目させることで、様々な疑問や気付きへつなげます。それらをきっかけとして、用いられている言葉や表現への自覚を高めさせていきます。

忠度都落

薩摩守忠度は、いづくよりやかへられたりけん、
侍五騎、童一人、わが身共に七騎取て返し、五条の

三位俊成卿の宿所において見給へば、門戸を閉ぢて開かず。「忠度」と名のり給へば、「落人帰りきたり」とて、その内さわぎあへり。薩摩守馬よりおり、身づからたからかに宣ひけるは、「別の子細候はず。三位殿に申すべき事あて、忠度がかへり参てお候。門をひらかれずとも、此きはまで立寄らせ給へ」と宣へば、俊成卿、「さる事あるらん。其人ならば苦しかるまじ。いれ申せ」とて、門を開けて対面あり。事の体何となう哀れなり。薩摩守宣ひけるは、「年来申し承て後、おろかならぬ御事に思ひ参らせ候へども、この二三年は京都のさわぎ、國々の乱、併しながら当家の身の上の事に候間、疎略を存せずといへども、常に参り寄る事も候はず。君既に都を出でさせ給ひぬ。一門の運命はやつき候ひぬ。撰集のあるべき由承り候ひしかば、生涯の面目に一首なりとも、御恩をかうぶらうど存じて候ひしに、やがて世の乱いできて、其沙汰なく候条、ただ一身の歎と存する候。世しづまり候ひなば、撰の御沙汰候はんずらむ。是に候巻物のうちにさるべきもの候はば、一首なりとも御恩を蒙て、草さ|勅めたれたりしが、鎧のひきあはせより取りいでて、俊成卿に奉る。(略)

単元導入

『平家物語』に関する既習の知識を思い出させ、場面の状況を捉えさせて、読みを深めていくきっかけとする。

- 「薩摩守忠度は、いづくよりやかへられたりけん」とありますが、ここは、どのような場面であると考えられますか。

(生徒の気付きや疑問)

気付きや興味・関心を引き出す

- 「薩摩守忠度は、どこからお帰りになったのだろうか」という意味だから、京都を離れていたことが分かるね。
- ここは、平家が京都から一斉に逃げている頃のことを描いている場面だよね。なんて、わざわざ京都に戻ってきて、俊成卿を訪ねたのかな。

- 「さる事あるらん」の「さる事」とは、どのようなことを指していますか。また、俊成卿がそう言った理由を考えてみましょう。

指示語の内容を押さえるだけではなく、なぜそう言ったのかを考えさせることで、登場人物の関係性を想像し、作品をより深く読むことにつなげさせます。

内容理解

本文の叙述を生徒自身に丁寧に追わせる。繰り返される表現や古文の慣用的な表現を場面に即して考えさせてることで、読みを深めることにつなげる。

- 忠度が都に戻ってきた理由が分かる箇所はどこですか。また、「**さりぬべきもの**」とは何を指していますか。

(生徒の気付きや疑問)

- ・「撰集のあるべき由承り候ひしかば、生涯の面目に一首なりとも、御恩をかうぶらうど存じて候ひしに」とあるから、勅撰集に自分の和歌を入れてほしいと頼みにきたのかな。
- ・「一首なりとも御恩を……」は2回言っていて、忠度の強い思いが表れているね。
- ・「さりぬべき」の「ぬ」は強意の助動詞だから、ここは「しかるべきもの」という意味になるね、「勅撰集に入れるのにふさわしい歌」を指すのかな。

- 他に忠度の和歌への思いを読み取れる箇所はありますか。

(生徒の気付きや疑問)

生徒の気付きを生かす

- ・ふさわしい歌を記した巻物を「鎧のひきあはせより取りいでて」とあるから、戦の場でも自分の歌を肌身離さず持っていたんだね。
- ・「草の陰にてもうれしと存じ候はば」は、勅撰集に和歌が入ったら、たとえ死んでしまってもうれしく思うということかな。

発展

『平家物語』の「忠度最期」の場面を読ませ、二つの場面を比較して忠度の人物像を考えさせることで、内容の解釈を深め、『平家物語』の魅力を考える。

- 「忠度最期」を読んで、忠度の武将としての姿と比較しながら、忠度はどのような人物と考えるか、まとめてみましょう。
- グループでそれぞれの意見を共有し、考え方の根拠とした本文の叙述を確認しましょう。

自身の考えを表現させる

「忠度最期」の場面から、忠度の武将としての姿、人物評とも併せて、自分の考えを深めさせます。また、根拠とした箇所を確認したり、他者の意見を聞いたりすることで、自身の考えを深め、広げることを目指します。

- 既習の『平家物語』の「木曾の最期」と比較して、源義仲と平忠度の描かれ方の違いを考えてみましょう（他の武将との描かれ方と比較する）。

『平家物語』における二人の立場、当時の状況をしっかりと捉えることは、『平家物語』の読みを深める一端となります。また、物語に登場する武将たちの最期の場面を読み味わうことを通して、時代を超えて語り継がれてきた『平家物語』の魅力やその本質に迫ります。

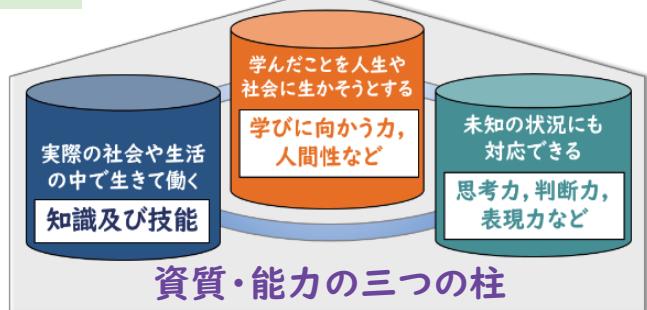
本事例での問い合わせの意図

文法事項や現代語訳の確認に留まらず、疑問形や反語表現、指示語等が用いられている箇所の叙述に着目させ、丁寧な解釈を促す問い合わせを設定しました。生徒が登場人物の心情や人物像に思考をめぐらせ、自身の考えを深める授業が展開できます。このことは、古文を主体的に読む態度を育成し、作品の魅力や価値を実感させることにつながります。

これからの時代に求められるのは?

「生きる力」

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善により、変化の激しい社会の中で、生きて働く資質・能力を育成すること。



なぜ「問い合わせ」に着目するのか?

学習指導における教師の大切な役割は、生徒の興味・関心を引き出し、思考を促すこと。

その鍵となるものが
「問い合わせ」



主体的・対話的で深い学び

習得・活用・探究という学びの過程の中で、「深い学び」を実現させるために

様々な切り口の「問い合わせ」を組み合わせ、問い合わせる順序やタイミングも考えて、一連の「問い合わせ」を構成する。

意図ある問い合わせが学びを深める

生徒

- ・学ぶことに興味を向け、新しい知識や技能を得る。
- ・学んだことを基に思考し、自分の考えの質を高める。
- ・気付きや発見から、探究心が育ち、新たな学びに向かう。

教師

- ・単元や題材を広い視点で捉えた授業の工夫につながる。
- ・生徒が主体となる授業を展開できる。
- ・単元や題材の本質に迫る授業を実現できる。

各教科等において目指す資質・能力を高める

高等学校に求められていること

生徒一人一人に社会で求められる資質・能力を育み、生涯にわたって探究を深める未来の創り手として送り出すこと。